

夏目漱石論

『こゝろ』の「上」「中」における語りの構造について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北川, 淑恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4638">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4638</a>

『こゝろ』の「上」「中」における語りの構造について

北川 淑 恵

『こゝろ』は大正三年四月から八月まで、一一〇回にわたり、東京大阪兩朝日新聞に連載されていた、漱石の作品としては最後の一人称小説である。この作品は「上」「中」「下」の三章により構成されているが、小説のメインとなる部分は「下」先生と遺書であり、「上」先生と私、「中」兩親と私」はここに至るまでの前置きと言っても過言ではない。<sup>注</sup>ところが、この「上」「中」はいずれも「下」にとつては必要不可欠な展開を提示していることもまた事実である。つまり、「上」「中」がなければ『こゝろ』は絶対に成立しなかつた訳である。

漱石はその作品群が、語りの形態が多様であることからわかるように、人称の問題には常に関心を持ち続けていたように思われる。そこで、本論文では『こゝろ』の「上」「中」における、一人称の語りの構造を分析したい。そして、何故、一人称でなければならなかつたのか、何故、回想形式でなければならなかつたのか、という

ことについて考察しようと思う。しかし、その前に語り手「私」がどういふ人物であるかを推察するのは無駄なことではあるまい。

一一

語り手「私」とはどういふ人物なのか、それは今、筆を執っている「私」がもはや「先生」の遺書を読む前の「私」ではない、という前提で発した疑問である。そもそも、『こゝろ』という小説には明らかに分断されるべき、いくつもの異なる時間が流れている。詳述は避けたいが、「上」「中」に限って言うと、「私」が筆を執っている語りの時間（現在）と、語られる内容——物語——の中の時間（過去）の二つである。そして、この二つの時間にそれぞれ「私」が存在する。語っている「私」と語られる「私」である。この二種類の「私」は確かに同一人物ではあるが、異なる時間に生き

るからには、前者を現在の「私」、後者を過去の「私」というように別々の存在として捉えなければならぬはずである。さらに、物語の登場人物「私」が「先生」の遺書を三等列車の中で読み終えてから、語り手「私」が手記を書き始めるまでに、空白の時間が存在する。「私」の過去と現在を二分するのがこの空白の時間であるなら、このうちに「私」が何らかの影響を受け、別の人格へと形成される可能性もあるのではないだろうか。(例えば、Kの死が先生のその後の生き方に非常に大きな影響を及ぼしたように、先生や「私」の父親の死によって、「私」の内面も少なからず変化したに違いない、と想像することができる。) (ここから、二者——語っている「私」を語られる「私」——を異なる人格と仮定することに よって論を進めたい。

語り手「私」の姿を追っていくにあたり、登場人物「私」と区別するため、ここでは便宜上、Narrator と Character の頭文字を取って前者を「私N」、後者を「私C」と名付けることにする。<sup>(注2)</sup>

手記を注意して読むと、「私N」の現在に小さく触れた言及が散らばっていることに気付く。以下にそれを列挙する。

①私<sup>。</sup>は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。(「上」)

②私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて來た。

〔上四〕

③(近づき難いと思いつつ)何うしても近づかなければ居られ

ないといふ感じが、何處かに強く働いた。(中略)それを見越した自分の直覺をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。

〔上六〕

④私は箱根から貰つた繪端書をまだ持つてゐる。(「上九」)

⑤私は今、前後の行き掛りを忘れて仕舞た(中略)けれども先生の態度の眞面目であつたのと、調子の沈んでゐたのとは、今だに記憶に残つてゐる。(「上十」)

⑥(奥さんと)差向ひで色々の話をした。然しそれは特色のない唯の談話だから、今では丸で忘れて仕舞つた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。(「上十一」)

⑦「裏」に、悲劇を持つ、「先生」の戀愛についての談話の内ただ一つ私の記憶に残つてゐる事がある。(「上十二」)

⑧私は其晩の記憶のうちから引き抜いて此所へ詳しく書いた。(「上二十」)

(傍点引用者。以下、断りがない限り同様。)

傍に。を付けた「私」が「私N」である。この「私」には、ただ「今」「今だに」などという現在を表わす言葉が文に含まれることがあるだけで、何の修飾語も付いていない。だから、現在「私N」がどういふ状況の下で、どういふ生き方をしているのかということがここからは全く推察できない。また、①⑤⑥⑦⑧のように、「記憶」に関連した言及が多い。記憶を手繰るといふことは、当然のことながら、過去に経験し、心にとどめておいた事柄を思い起こすことに外ならない。この五例に限らず、ここに引用した文全てに共通

して言えるのは、「私N」は現在の自分について、過去に関連させずに単独で語ることは絶対でないということである。芳川泰久氏もこの現在についての言及が過去を振り返るついでに、つまり回想に付随した状態でしばしば表われることを指摘している。<sup>(注3)</sup>よって、重きを置くのはあくまでも回想であり、現在の状況を語ることは手記を書く目的ではないと言える。

「私N」は現在の自分について語ることを避けているのかもしれない。今の自分を過去に関する言説によって包み隠そう、あるいは、語りの背後に払拭しようというくらいさえ感じられる。

漱石は「私N」に関して無関心だったのだろうか。あるいは、意図的に「私N」の影を潜めようとしたのか。この疑問については後から考察することにする。

「私N」は回想との関連なしには自己を語る事がなかった。そうすると、過去の自身についての言説の中に何か「私N」について知る手がかりがないか、探ってみる必要がある。そこで、今度は過去の「私」、「私C」に関する言説を追うことにする。

。(「先生と知り合になつた」) 其時私はまだ若々しい書生であつた。〔上二〕

。若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた。〔上三〕

。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。〔上四〕

。若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。〔上七〕

。年の若い私は稍ともすると一圖になり易かつた。〔上十四〕

。若い私の氣力は其位な刺戟で満足出来なくなつた。〔上二十三〕

。兎に角若い私には何故か金の問題が遠くの方に見えた。〔上二十九〕

先程とは異なり、「私」に「若い」という修飾語が付いているのが目に留まつたので、右に挙げた。「私C」の若さが殊さらに繰り返されている訳であるが、裏を返せばこれは「私N」がもう若くはないということの表れになるのではないか。<sup>(注4)</sup>また、「私N」は過去を振り返って、自分に客観的な判断を下せる立場にあるということがわかる。ここから、物語の時間から語りの時間に至るまでにある程度の歳月が経過しているという仮説が立てられる。

「私C」に関する言説の中に「私N」との隔たりを感じさせる語は他にもある。

「私」は「先生」に雑司ヶ谷へ募参りに「伴れて行つて」くれるよう頼んだ時、「話す事の出来ない理由があつて、他と一所にあすこへ募参りには行きたくない」と断られる。〔上六〕

。私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する氣で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものの、一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。(中略)若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、も

し間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。〔上七〕

これも、「私N」が今の時点から「私C」に客観的判断を下す箇所である。「私C」について「其時の」という修飾語によつて、「今考え」ている「私N」との間には距離が存在していることがわかる。右の引用文によると、「私N」は「先生を研究する氣」のない「私C」の態度を「尊むべきもの」であると思つている。何故なら、今の「私」なら過去と全く同じ「態度」は取れないからである。つまり、興味を抱いた相手について「不思議に思」うことがあれば、無理に知ろうと追究するかもしれないのである。また、何の「自覺」も深い考えもなく「たゞ其儘にして打過ぎた」ことを「尊い」と思つているのであれば、たとえ「私N」が「其儘に」打ち遣つたとしても、それは何らかの意図や目論見を伴つたことかもしれないのである。そういうた具合に、「私N」は「私C」とは異なる行動に出る可能性が強い。

「私N」はもう「私C」が持つていた「若さ」故の「尊さ」——純粹さ——を失くしてしまつてゐるのである。これは「私N」がすでに「私C」とは別の人格であるということの証明にはならないだろうか。

続けて「私C」に関する言説を追つていくことにする。

ある時、「私C」は「先生」から、父親が亡くなる前に財産問題を片付けて置くべきだと勧告される。しかし、その時はその話をあまり重要視しない。

先生の氣にする財産云々の掛念は其時の私には全くなかつた。私の性質として、又私の境遇からいつて、其時の私には、そんな利害の念に頭を悩ます餘地がなかつたのである。

〔上二十九〕

前例と同様、「私C」に「其時の」という修飾語が付いている。この語が無くても文章の意味は通るはずであるが、わざわざこう断つている点に注目したい。やはりこれによつて二者は区別されることになる。つまり、「私C」には「其時の」「性質」や「其時の」「境遇」から、「財産云々の掛念が全く必要なかつた。しかし、もし今の「私」の「性質」や「境遇」であつたなら、「利害の念に頭を悩ま」したであろう、あるいは、「私N」は実際にそういう問題を抱えている（抱えていた）ということが暗示されているのである。そして続きの部分には、

考へると是は私がまだ世間に出ない爲でもあり、又實際其場に臨まない爲でもあつたらう

とあるところから、これまでの論理に従つと、恐らく「私N」はもうすでに「世間に出」ている（出たことがある）、また、「實際」父の死に「臨」んだであろうと考えられる。

父の死を経験した「私N」は「財産云々の掛念」に関して、以下のように述べている。

私の家庭でそんな心配をしてあるものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、人もないと私は信じてゐた。〔上二十八〕

「一人もなかつた」ではないことから、「信じてゐた」のに、父

が「實際」亡くなって、実は「心配をしてゐるもの」がいたということが今では判明していると読み取れる。さらに深読みすると、その結果、「利害の念に頭を悩ま」さざるを得ない状況に陥つたとも受け取れるのである。

父が亡くなった後に「私」が気付いたことはこれだけではない。父が死病に侵されていることをあまり重大に受け止めない「私C」に対して、「奥さん」が以下のように忠告する場面がある。

「毒が脳へ廻るようになると、もうそれつきりよ、あなた。笑い事じゃないわ」無経験な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしてゐた。〔上三十四〕

「無経験な」とは身近な人の死にまだ遭遇したことがなかった、という意味であろう、そのために「私C」は死の厳肅さに氣付かず「にやにやしてゐた」のである。しかし、父や先生の死を「経験」した今では「私N」は誠実に「死」を受け止め、この時の自分の態度を反省しているに違いない。

再度、「私N」が「私C」のことを「其時の私」と表現する例を挙げる。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云つた。私は「左右ですな」と答へた。然し私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をたゞ蒼蠅いもの、様に考へてゐた。〔上八〕

「奥さん」に対して「何の同情も起らなかつた」のは「其時の私」には子供がいなかつたからである。しかし今では、子供とは

「たゞ蒼蠅い」だけのものではないことを知っているのである。そうすると、今の「私N」には子供がいるということになる。<sup>(注)</sup>そして、心から「奥さん」に「同情」しているはずである。以上の考察により、「私」は空白の時間を挟んで「性質」や「境遇」が少なからず変化したことが推測できる。以下にそれをまとめる。

#### 「私C」

- ① 書生〔上三十二〕で卒業。「職業といふものについて、全く考へた事がない」〔上三十三〕。若年。
- ② 屈託がなく純粹。
- ③ 金銭問題に無頓着。金に不自由なく暮らしている。
- ④ 死に対する觀念が稀薄。
- ⑤ 「女といふものに深い交際をした経験のない迂濶な青年」〔上十八〕。

#### 「私N」(推測)

- ① 社会人。若くはない。
- ② 人間関係に慎重。時には交際に利害などの計算が伴う場合がある。
- ③ 生きていく以上、人間には金銭面での悩みが付き物であることを知っている。
- ④ 人間の死を厳肅に受け止められる。
- ⑤ 結婚し、子供がいる。そして、子供のいる境遇に幸せを感じている。

若くて未熟な「私C」に比べ、「私N」は人生経験が豊富であるように受け取れる。やはり、物語の時間から語りの時間までには少なくとも「私」がこのような経験をするだけの年月は経過していたようである。ここから、「私C」と「私N」は異なる人格と捉えて問題ないと言える。従って、語りの構造を分析するにあたり、「私C」と「私N」を別々の存在として扱ってみたい。

## 二二

前章では語り手「私」の人物像を追ってきた。ここで主題に戻って、一人称体で書かれた「私」の手記の構造上の問題について考えていくことにする。

一人称小説の語りの形態は、その内容から次の二種類の型に区分できる。一つは語り手が主に自分自身について語る「**「私」タイプ**」、もう一つは主に自分以外の人物について語る「**「証言」タイプ**」である。<sup>(注)</sup>「こゝろ」の「上」「中」にこれを当てはめてみると、少し複雑な構造になっていることに気付かされる。まず、「上」先生と「私」は「私」における主に「先生」についての「証言」であると共に、「私」自身の「**「私」**」でもあるように受け取れる。次に「中」両親と「私」であるが、これは一見「私」の「**「私」**」であるようであるが、しかも父（と家族）についての、あるいは「先生」についての「証言」であるようにも捉えられる。つまり、「私」の手記は「**「私」**」と「証言」の両タイプが融合しているのである。これは語り手自身

も物語の中に頻繁に登場する場合の、一人称小説で使われる手法である。作者漱石はこれを何らかの効果を狙って意図的に用いたのかもしれないが、この手法のために語りの構造にある危険がはらんでしまっている。

以下は「私C」が危篤の父の許で受け取った「先生」からの手紙——遺書——を読む場面である。

私はそわ／＼しながらたゞ最初の二頁を読んだ。其頁は下のやうに綴られてゐた。

「あなたから過去を問ひたゞされた時、答へる事の出来なかつた勇氣のない私は、今あなたの前に、それを明白に物語る自由を得たと信じます。然し其自由はあなたの上京を待つてゐるうちには又失はれて仕舞ふ世間的の自由に過ぎないのであります。従つて、それを利用出来る時に利用しなければ、私の過去をあなたの頭に間接の経験として教へて上げる機会を永久に逸するやうになります。(後略)」

(中略)

「自由が來たから話す。然し其自由はまた永久に失はれなければならぬ」

私は心のうちで斯う繰り返しながら、其意味を知るに苦しんだ。(中十七)

「私N」はここに「あなたから……」という遺書の言葉を引用することによって、「先生」の言説を再現している。この言説自体は「先生」についての「証言」を成立させるための一つの要因である。

「私N」はまた、それを読んだ「私C」が「自由が来たから……」

という言葉を「心のうち」で反復し、「其意味を知」ろうとする様子をも再現している。これはすなわち「**自由**」である。しかし、同時にこれは「証言とも言える状態」になっている。何故なら、この「**自由**」の中には「証言」の要素が取り込まれているからである。

再現した「自由が来たから……」という言葉自体は「**自由**」の要素ではない。これは「先生」の言説を圧縮したものであり、「先生」についての「証言」の要素である。だから、「私N」は「証言」の要素を利用して「**自由**」を行ったということになる。言い換えると、「**自由**」と見せて「証言」を再度行っていたのである。<sup>(注7)</sup>

「私N」は他者の言説をただそのまま再現しただけでなく、結果としてその要素をまた別の所で応用していたことになる。ここから、「私N」という語り手は他者である登場人物の言説を再現する際、「私C」という登場人物を利用して、その言説の中に介入することが可能であると考えられる。

しかしそれに伴って、「私N」の語りには、本来入り込めないはずの言説にまで介入する余地があるのではないかとという疑惑が生じた。

「私C」と「奥さん」の問答に次のような場面がある。

「今奥さんが急に居なくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きてゐられるでせうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないぢやありませんか。(後略)」

(中略)

「(前略) 世の中の何方を向いても面白さうでない先生は、あなたが急にゐなくなつたら後で何うなるでせう。先生から見てぢやない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでせうか、不幸になるでせうか」

「そりや私から見れば分つてゐます。(先生はさう思つてゐないかも知れませんが)。先生は私を離れ、ば不幸になる丈です。(後略)」〔上十七〕

この「(先生はさう思つてゐないかも知れませんが)」という言葉は一体誰が発したもののなのか。「奥さん」の発言部分を示すカギ括弧の中に書かれてある以上、普通なら「奥さん」が発したと考えるのが当然である。だが、「奥さん」が発したのなら何故丸括弧でくくる必要があるのか。これはやはり、「奥さん」の内面の声として「私N」が付け加えたものと考えるべきであろう。

「私C」は同様の質問を二度繰り返している。「奥さん」は、一度目は「先生」に「聞いて見」なければ「分らない」として応えない。二度目は「私C」に、「奥さん」の立場から考えて答えるよう強いられ、「私から見れば」と断わつてから答えている。「私C」は一度目の返答の様子を踏まえ、恐らくまた、「奥さん」のこの時の声の調子から、「私から見れば……」の言葉の裏側の意味を「先生はさう思つてゐないかも知れませんが」と解釈した。そして「私N」は語りの段階で、その微妙な部分——普通に記述しただけでは伝わらない——を「奥さん」の心の声として「私C」が理解した姿



で再現した。要するに、「私N」は他者の発言をそのまま再現するだけでなく「私C」を利用して、さらに翻訳という形で活用したということになる。そして、その痕跡が丸括弧として残ってしまっているのである。

しかし、実際には発せられていない言葉がそれにもかかわらず、(カギ括弧)の中に本来の発言と共に再現されるのは問題がある。決して忠実な再現が行われたとは言えなくなる。何故このような現象が起こったのだろうか。それは「証言」の中に「自白」の要素が紛れ込んだからである。語り手「私N」は、「奥さん」についての忠実な「証言」を行うための直接話法(本来絶対<sup>絶対</sup>に外から介入できないはずの発言)の中に、「私C」がその時感じたこと——「自白」として別に記述されるべき内容——をまるでその話者「奥さん」自身の言葉であるかのように見せて挿入したのである。

「私N」は「自白」の要素を「証言」において応用することによって、結果として「証言」と同時に「自白」をも行っていたことになる。そして、そのことが原因で登場人物の言説が変形してしまつたのである。ここから言えるのは、「証言」と「自白」の両タイプが融合する語りには、時にはそれが混在して語りの構造に危険——語り手が登場人物の言説に介入して、忠実性の欠けた再現を行ってしまうという——が生じる可能性があるということである。

語りの中に「証言」と「自白」が混在する場合があるならば、「私N」と「私C」が混在してしまうという、絶対にあつてはならない現象が起こり得る可能性を疑ってみなければなるまい。

語りが過去を回想する形式になっている場合、作品は物語の時間とそれを包み込む語りの時間との二層構造によって成り立つ。そのため、それぞれの時間に生きる「私C」と「私N」は別々の存在として区別して認識されなければならない。このことは以前述べたが、視点を変えると過去の「私」、「私C」は物語の全貌を知らない存在であると言える。(例えば、「先生」と出会つた頃の「私C」は後に「先生」が自殺することになるとは思いもよらないはずである。)物語全体の出来事を完全に見渡すことができるのは、小説内の存在としては語りの層に生きている現在の「私」、「私N」だけである。だから、「私N」が知っていることでも「私C」には知らない場合がある。従つて、「上」「中」では「私N」が語る役割を、「私C」が語らない役割をそれぞれ演じているのである。

ところが、ある場所でその構造に亀裂が入ってしまった。その場所とは、「私C」が「先生」から遺書を受け取り、最初の二頁を読んだ後の場面である。これは以前、引用した場面(61頁(中略))と示した部分参照)であるが、問題が起こっているのは省略した部分であるから、その部分だけをここに引用する。

私は其所迄讀んで、始めて此長いものが何のために書かれたのか、其理由を明らかに知る事が出来た。私の衣食の口、そんなものに就いて先生が手紙を寄こす氣遣はないと、私は初手から信じてゐた。然し筆を執ることの嫌な先生が、何うしてあの事件を斯う長く書いて、私に見せる氣になつたのだらう。先生は何故私の上京する迄待つておられないだらう。(中十七)

この傍点部分は物語の層に属するのか、語りの層に属するのか。あるいは、「私C」が思ったことなのか、それとも「私N」が語っていることなのか、とした方が良いのかもしれない。というのも、前後の関係から考えると、「私C」が思ったことと捉えるのが普通であるが、ここにはそう断言できない原因となった、矛盾が起こっているのである。

仮に「私N」が語っていることとする。「私N」は全てを知っている存在であると先程述べた。手紙を最後まで読んでこれが遺書だと知っている「私N」は「先生」が「私が上京する迄待<sup>待</sup>」てずに過去を打ち明けた理由も知っているはずである。それなのに、このように「何故……なのだろう」と疑問を抱くのはおかしい。従ってこの仮説は崩れる。かと言って、この段階では遺書の内容を知らない「私C」（知っているのは「先生」の過去が書かれてあるというこ<sup>こ</sup>とだけ）が、「あの事件」などという、いかにもすでに知っているような言い方ができるのだろうか。「あの事件」とは「K」の自殺を意味する。確かに（上十九）で、「私C」は「奥さん」から「先生」が大学時代に「親友を一人亡くした」という話を聞いている。しかし、それだけで「あの事件」とは言えないはずであるし、第一、そのことが書かれているかどうかこの段階ではわからないはずである。だから「私C」が思ったことと考えるのにも少し問題がある。この矛盾は、作者が「私C」と「私N」を混在させたことによつて生じたと言えは説明がつく。

『こゝろ』は新聞に連載されることが初めから想定されて書かれ

た小説であった。連載の小説というと、「明日の展開はどうなるのか」「この先一体何が起こるのか」という期待によって、読者は毎日欠かさず読もうとするものである。つまり「連続もの」の形式においては、興味・疑問・想像・期待というようなある種の緊張感が読者を定着させる秘訣となるのである。そこで、常に読者を引き付けておく必要のある作者は、「上」で生前の「先生」に関する謎が提示され、「中」を介して「下」に至った時、初めて遺書の中で「先生」自身の告白としてその謎が解き明かされるという、非常に緊張感のある展開を思い付いた。そして、その謎かけのために「私C」と「私N」の特長を巧妙に使い分けていたのである。

この段では、作者は「私C」の利点を活かす手段を取ろうとした。読者に次はどうなるのかと推理させたい一心で、「私C」の「知らない」部分を利用して読者の未知の領域に踏み込んだのである。

「私C」がここで「何故……なのだろう」と疑問にしていることは読者にとつても解らないことであるため、読者は自然に「私C」に視点を重ねることができる。また、「私C」は「語らない役割」なので、問題提起したまま放っておける。読者に考えさせる余地を容易に残しておけるのである。

ところが、この「私C」の疑問の中に、語る役割「私N」にしか使えない言葉が紛れ込んでしまった。つまり、それが「あの事件」という言い回しだったのである。何故、紛れ込んだのか。読者はこの一言で何か「事件」が起きたのだ、恐らくそれがこの先手紙（遺書）の中で書き表わされるのだ、ということを感じるのである。

だから、これは紛れ込んだというよりもむしろ、作者が意図的に挿入したものと考えるべきであろう。結果的に「私C」だけでなく、「私N」の役割をも利用していたことになるのである。

しかし、「私C」の言葉の中に、「私N」にしか使えない言い回しをはめ込んだのは間違いだつた。いくら読者を誘い込む手段であるとは言え、このために作者は「私C」と「私N」を混同して用いたことになってしまふからである。またそれに伴い、物語と語りの区別までがはつきりとは付かなくなつてしまふのである。

結局、作者は「私C」と「私N」の役割を駆使したことによつて、ここではかえつてそれが裏目に出たとと言える。そして、この過失は語りの構造に、過去と現在・物語と語り層の境界線を曖昧にしてしまふという危険をもたらしたのである。

それにしても、このような危険を冒してまでも何故、漱石は『こゝろ』の「上」「中」に回想の一人称体を採用しなければならなかつたのか。次の章からは、この語りが作品にもたらす利点を探っていく。

#### 四

作者漱石はこの小説を書くにあつて、「謎かけ」＋「謎とき」の構成を想定していた。つまり、「先生」は何故このような態度を取るのか、何故こんなことが言えるのか、また何のために死ななければならなかつたのか、という疑問を読者に抱かせ、その上で時折

そのヒントを暗示し、最後に「謎」を解き明かそうとしたのである。そのため、読者にも物語の中の「先生」に関する「謎」に興味を持たせ、さらにそこに関与させることを狙つていたと言える。そしてその前提として、何よりもまず、読者を作品に引きつけておく必要があつた。

そこで、漱石は読者を物語の世界に没入させるためにある方法を思いついた。それは漱石自身の、作家ではなく文学研究者としての仕事である『文學論』（明40）の中で、すでにその効果が論じられていたものだつた。

第四編第八章の「間隔論」に次のような記述がある。

思ふに普通の作物に在つては、著者の紹介を待つて始めて、篇中の事物、人物を知るを例とす。著者の彼と呼び彼女と稱するものは必ず著者に對して一定の間隔を保つを示すもの、而して、其著者と吾人讀者とは亦一定の間隔に立つが故に、吾人と篇中の人物との間には二重の間隔を控へたるは明か<sup>(註15)</sup>なり。

ここで「普通の作物」というのは、三人称で書かれた作品のことである。また、「著者」とは語り手のことである。三人称作品において、読者は語り手を介してしか登場人物を知ることができない。しかも読者と語り手、語り手と登場人物、二者それぞれに存在する距離を想像すると、読者と登場人物の間にはかなりの隔たりがあることがわかる。これが、今一つ読者が物語世界に没入できない原因であると漱石は言う。そこで、読者と登場人物の間にある距離を縮められるような「空間短縮法」<sup>(註14)</sup>を用いればこれが解消できるとし、

その一つとして、読者を語り手と「同立脚地に置く」こと(注15)を考えるが、それは形式上、実際には不可能なことだった。そして別にもう一つ考えた方法がこれである。

読者を著者の傍らに引くに代ふるに、著者自から動いて篇中の人物と融化し、毫も其介在して獨存するの痕迹を留めざるが如き手段を用ふ。此時に當つて其著者は篇中の主人公たり、若しくは副主人公(注16)なり、もしくは篇中の空氣を呼吸して生息する一員(注16)たり。

語り手自身が登場人物として物語の中に入ってしまえば、読者が物語に直接触れることを遮るものがなくなり、読者と登場人物の間にある距離が短縮できると言うのである。

具体的にはその効果が語り手による登場人物の呼び方に表われる。彼とは呼ばれたる人物の現場に存在せざるを示すの語なり。

(中略)彼を變じて汝となすとき、現場に存在せざる人物は忽然として眼前に出頭し來る。(中略)此故に彼は篇中の人物を讀者より尤も遠きに置くものなり。汝は之を作家の眼前に引き据ゑるの點に於て其距離を縮め得たるものなり。(後略)

(中略)

若し夫れ作家にして終始一貫して篇中人物を呼ぶに汝を以てする事を得るとせば、作家が變じて余となつて篇中に入らざる、の場合ならざるべからず。余の先きに擧げたる作家と作裏の一人とが同化せる場合即ち是なり。(傍点漱石。)

ここで「作家」というのは、以前「著者」と記されていた「語り

手」のことである。漱石が言う所からすると、語り手がその立場を登場人物へと移動させた場合、自分のことを「私」と言うようになるだけでなく、「彼」と呼んでいた人物を「あなた」と呼ぶようになるはずである。実はこれは、三人称作品から一人称作品に変化させた時の現象を表しているのである(注18)。またその変化に伴い、(他の)登場人物から「讀者への距離は尤も短縮せるもの」になると論じている。

つまり「空間短縮法」とは、語り手を物語世界にも登場させることによつて、「中間に介在する著者の影を隠して、讀者と篇中の人物とをして當面に對坐せしむる」ことが可能となる、すなわち一人称体を用いる方法であつたのである(注18)。

以上から、一人称体の語りを用いれば、読者と登場人物が「共に同空氣に生息する」程接近できるため、読者と物語世界に没入させることが可能になるとわかつた。だから、「こゝろ」の「上」  
「中」の語りには一人称体が採用されたのである。ただ、ここで一つ留意しておきたいのは、この場合、本当にこれだけで「中間に介在する著者の影を隠」すことまで可能になつたのかということである。というのも、『こゝろ』の構成上、「謎かけ」の部分である「上」「中」には「私N」と「私C」の特長を生かした語りが必要であるため、一人称に回想を加えなければならぬ。従つて、「私」という語り手は登場人物の立場として物語(過去の層)の中に入ったのに、その外側(現在の層)では語り手の立場で依然として語りを行つてもいるということになる。だとすると、読者と登場

人物の間隔は縮まったとしても、やはりその間に存在する語り手の影までは隠せないのではないだろうか。同時に、語り手が邪魔になつて「當面に對坐」することさえも危ぶまれる。

しかし、漱石はこの問題に対する解決策を生み出し、『こゝろ』においてそれを実践しているのである。その方法とは、「私N」を寡黙な語り手に仕立て上げることであつた。「私N」に極力語りせなかつたのである。と言つても、もちろん「私N」は語り手である限り、常に「私C」やその他の登場人物、あるいはそこに起こつてゐる事柄や事情について説明していなければならぬ。だから漱石は、「私N」にはそれ以上のこと、すなわち現在の自分のこと（自分の置かれてゐる状況、その周囲で起さる事柄）をほとんど何も語らせないでおく手段を取つた。つまり、語りの機能を失わせない程度まで「私N」に沈黙を守らせ、それによつてその人格を持つた人間としての姿が明確に浮かび上がらないようにしたのである。語り手の影を隠すとはこういうことだつたのではないだろうか。

『こゝろ』の「上」「中」において語り手「私」は現在の自分のことを語らなかつた。以前、その理由として、漱石が「私N」に無関心だつたからだろうかという疑問が生じていた。しかし、ここではつきりとそうではなかつたと言ひ切れる。漱石は「私N」に無関心だつたところか、充分に意識していたのである。だからこそ、その影が気になり、意図的に消し去ろうと企てた。何故ならその影のせいで読者が登場人物と直接に對坐できなくなることを恐れていたからである。

漱石は「私」に現在の自分の姿を語らせないことで、語り手としての「私」の影をできる限り払拭した。ここに来てようやく本当の意味で、「中間に介在する著者の影を隠して、讀者と篇中の人物とをして當面に對坐せしむる」という「空間短縮法」を使いこなせたことになる。そして、讀者を物語の世界に没入させることができたに違ひないのである。

## 五

漱石が語りて回想の一人称体を採用したのは、讀者を物語世界に没入させたいがためであつたのである。これまでの考察から、『こゝろ』には危険を冒してまでもこの形式を用いる価値があるということがわかつた。讀者は回想の一人称の語りによつて登場人物と對坐し、物語の中で起こつてゐる出来事をその時その場で見聞したかのような錯覚に陥つた。そして同時に、物語の中にいる「私C」と同じ疑問を抱くようになり、自然に「先生」の「謎」に關与することができたのである。従つて、讀者に緊張感をもたらす展開を最も効果的に引き立て、漱石が新聞連載という側面においても成功を収めることができたのは回想の一人称体の成せる技であつたと言える。

利点はこれだけではない。以前、「私N」は小説内で最も完全に物語全体を見渡せる存在であると述べた。だから小説の外で同様の立場にある作者は、自分の視点を語り手の視点に重ね合わせ、作品

を書き進めていくことができたと考えられる。<sup>(註23)</sup>その証拠に、「私N」は人生経験の豊富な人物であると推察したではないか。当時の漱石が成熟した大人であったことは言うまでもない。つまり、ここで言いたいのは、回想の一人称体が作者の意図を語りの中に最も反映させやすいということである。

漱石は『こゝろ』の「上」「中」において、語りの機能をフルに活用した。この小説全体の構想に貢献できる程の——漱石の創作意欲を満たせる程の——利点を兼ね備えた語りの形態は他にはあり得ないであろう。よって、この作品は回想の一人称体を語りに用いなければ書けなかつたはずである。

『こゝろ』は漱石の方法意識によって、語りが奏でる効果が最大限に駆使された、最後の一人称小説であった。

注

『こゝろ』本文の引用は全て『漱石全集』第六卷(注一参照)によつた。

(1) 小宮豊隆「『心』『道草』解説」(『漱石全集』第六卷(昭41・5、岩波書店)に次のような記述がある。

『先生と私』や『両親と私』は、言はば『先生と遺書』の爲に存在する、短篇である。それ自身獨立して、『先生と遺書』とともに『心』の中で鼎立するほどの、重さを持つてゐるものではない。

(2) 中本友文「『こゝろ』の「私」/漱石の一人称小説のへ語

り)」「(「高知大学学術研究報告」第38卷、平1・12)に  
做つた。

(3) 芳川泰久「『声』の検閲——『こゝろ』の語法を聴く」  
社(「漱石論——鏡あるいは夢の書法」平6・5、河出書房新

(4) 中本氏がすでに同様の指摘をしている(注2参照)。

(5) 小森陽一「『こゝろ』を生成する「心臓」」(「成城国文学」1号、昭60・3)に既に指摘がある。

(6) 注2に同じ

(7) これは芳川氏(注3参照)の以下の発想を逆転させたものである。

それは、先生の言葉の再々再現として差し出されながら、同時に、「内面」という自己の言語機制のフィルターを経た、いわば濾過された自らの言葉としても提示されているのだ。(340頁)

(8) 芳川氏の論(注3参照)に同様の指摘がある。

丸カッコが一つ記されているだけで、この(先生はさう思つてゐないかも知れませんが)という言葉が、奥さんの発話の現前ではなくなる。(356頁)

(9) 補足として久保教子「『こゝろ』私見——語りの構造をめぐつて——」(「山口国文」13号、平2・3)の見解を紹介する。

先生は、すべてを知つた者ではあるが、話者によって語

(10) られる受身の存在である。同時に、過去について「私」に語ろうとする意識が先生の内に成熟し、自殺をするという事実を、先生本人でさえ自覚していない。小説当初から知る者は、話者としての「私」のみである。〔47・48頁〕  
「先生」が「私」の上京まで待てなかつたのは、「明治の精神に殉死する」〔下五十六〕という表向き理由づけをしたからである。

また、長い手紙を書いてまでも過去を打ち明けなければならなかつたのは、「私」に約束したからだけではなく、自分の「過去を善悪ともに他の参考にする」〔下五十六〕ためでもある。そうすると、明治が終わつた後すぐに自殺しなければ意味がない。過去を打ち明けてからでなければ自殺できない「先生」は、もし「私」が上京するまで会って話す機会を待っていたら、益々時間が経ってしまい、そのうち自殺する機会を逃してしまふ恐れがある。だから仕方なく筆で書いて送つたのである。

(11) 芳川氏（注3参照）が既に同様の指摘をしている。

「出来事」の水準から見れば、先生の手紙の冒頭しか読んでいないこの段階で「あの事件」とは言いようがなく、しかしそれが可能なのは、ここに「語り」のへいま・ここ」という時間と視点が混入しているからだ。〔34頁〕

(12) これは、大岡昇平「「こころ」の構造」（『文藝界』第27巻第9号、昭48・9）の次の記述に基づいて推測したもので

ある。

「こころ」は私が中学生のとき読んで、非常に打たれた小説なんです。それは非通な『先生と遺書』という第三部なんです。それまでの話の順序、なにか秘密の雰囲気最初にあつて、すべてが非常にうまく語られていて、わかり易いせいだったと、こんど読み返して思いました。

〔173頁〕

(13) 『文學論』（『漱石全集』第九卷、昭41・8、岩波書店）を引用した。385頁

(14) 同右

(15) 同右

(16) 注13参照・385頁、386頁

(17) 同右・388頁、389頁

(18) 三人称の作品でも語り手が「私」と言うこともあるが、登場人物との直接の接点がないため「あなた」と呼ぶことはない。

(19) 注13参照・388頁

(20) 注13参照

(21) 確かに、戯曲など脚本形式で書かれた作品は語り手が存在しないため、読者と登場人物の距離は近い。しかし、ここでは漱石自身、以下のように断っているのである。

脚本は首尾を通じて問答より成るが故に篇中の人物は相互を呼ぶに汝を以てせざる可からずして、此点より来る利

益を十二分に取め得るものとす。(中略)但し篇中の人物が相互に汝と呼ぶは、作家が篇中の人物を呼ぶに汝を以てすると異なり。〔389頁〕(傍点漱石)

「此點より來る利益」とは「讀者は汝と呼ぶ人を通じて、汝と呼ばれたる人と對坐する事を得」〔388頁〕という部分を指す。

これよつてこの章で論じられたのは、完全に語り手の存在しない脚本作品に当てはまることではなく、あくまでも語り手が語りの機能を果たす上で、登場人物としての役割をも担う場合の作品にのみ通用することだつたとわかる。

(22) 注15参照・389頁

(23) この点に関しては、中本氏の見解(注2参照)に基づいて論じた。

(24) 漱石は『こゝろ』執筆当時、四八歳(亡くなる二年前)だつた。



